

# プログラム・ノート

解説◎柴田 克彦

## ノスタルジーを誘う2曲の大作・名曲をお届け

今回の「千葉市定期演奏会」は、「コパケン」こと小林研一郎の登場。ドヴォルザークの交響曲『新世界より』の全曲が披露されるだけでなく、前半にもグリーグのピアノ協奏曲が置かれた、“大作2曲プログラム”です。

東欧と縁の深いコパケンは、かつて同国の看板オーケストラ＝チェコ・フィルの常任客演指揮者を務め、2002年5月には、「プラハの春音楽祭」のオープニングコンサートの指揮を東洋人では初めて担当。大統領臨席のもとでスメタナの『わが祖国』全曲を演奏し、快挙と讃えられました。この国民的シンボルともいえる公演を任されたのは、チェコの魂の真の理解者たることの証し。当然、同国の大作曲家ドヴォルザークも十八番にしていますから、今回も入魂の名演が期待されます。

グリーグのソロを弾くのは、人気・実力ともに日本を代表するピアニスト、小山実稚恵。デビュー30周年(2015年)を超えて、ますます円熟味を加えている名手が、華麗かつ繊細なピアノを聴かせてくれます。

ここでは、東欧を代表する交響曲と北欧を代表する協奏曲を、たっぴりと味わいましょう。

## ドヴォルザークとグリーグ、“国民楽派”を代表する作曲家たち

音楽用語を短く解説したあるホームページを見ると、“国民楽派”についてこのような記述がなされています。「19世紀の中央ヨーロッパ以外の国の、民族主義的な音楽家の一派。ドヴォルザーク、グリーグなど」。これで分かるように、本日登場するアントニン・ドヴォルザーク(1841-1904)とエドヴァルド・グリーグ(1843-1907)は、国民楽派を代表する作曲家です。

国民楽派とは、自国の民族音楽やその語法をクラシック音楽に取り入れた作曲家を指しており、ドヴォルザークはチェコ、グリーグはノルウェーの現地音楽と関係性を有しています。国民楽派の全盛期は19世紀後半。同時期に生きた二人と同じ世代には、ムソルグスキー(1839-1881)、リムスキー＝コルサコフ(1844-1908)といったロシア五人組の面々や、カテゴリーがやや微妙なチャイコフスキー(1840-1893)などがいます。ただし区分的には後期ロマン派の時代。国民楽派という用語は、ドイツ、オーストリア、フランス、イタリアの作曲家にはほとんど用いられな

いため、ロシア、東欧、北欧、スペインなどを音楽後進国とみなした差別的なニュアンスがなくありません。しかしそれらの地域から次々に大家が現れたのも事実。いわば1つのムーブメントであり、今回の二人はその象徴的存在といえるでしょう。

とはいえ二人は、ドイツ語圏の音楽から少なからぬ影響を受けています。ハプスブルグ帝国下のチェコに生まれたドヴォルザークの飛躍のきっかけは、1875年にオーストリア国家奨学金を獲得し、審査員だったブラームスの後押しを得たこと。彼は当初ワグナー、次いでブラームスの影響が顕著な作品を作曲しています。一方グリーグの母はドイツで教育を受けたピアニストで、彼自身も15歳から3年半の間、ドイツのライプツィヒに留学し、メンデルスゾーンやシューマンなどドイツ・ロマン派の音楽から直接的な影響を受けました。しかし結果的に二人は、民族音楽の要素を独逸的な様式の中に昇華させ、国際的な普遍性をもたらしました。本日の2曲はその良き実例となる名作です。

## 北欧の“看板”協奏曲、グリーグ「ピアノ協奏曲」

前半は、グリーグのピアノ協奏曲。彼が残した唯一の協奏曲にして、シベリウス(フィンランド)のヴァイオリン協奏曲と並ぶ、北欧の看板協奏曲です。

グリーグは、24歳の年＝1867年にいとこのソプラノ歌手

ニーナと結婚し、翌1868年には女兒アレクサンドラが生まれます。同年彼は妻子と共に妻の両親がいるデンマークのコペンハーゲンに行き、当地郊外の夏の家でこの協奏曲の大枠を作曲。冬にオスロで完成されました。初演は



グリーグはピアノのための作品を数多く残し、「北欧のショパン」と呼ばれることも。「ペール・ギュント」など劇付随音楽も有名です  
(photo by Elliott & Fry)



グリーグと妻のニーナ。1899年頃  
(photo by Ludwik Szaciński)

1869年4月コペンハーゲンにて。そこで大成功を収め、同曲は彼の出世作となりました。つまり、若きグリーグが幸せの絶頂期に生み出した作品であり、短調を基調としながらも明るさの漂う曲想に幸福感が反映されています。ちなみに愛娘はこの後すぐに亡くなり、夫妻をいたく悲しませますが、妻ニーナはグリーグの良き理解者、歌曲の紹介者として夫ともども讃えられる存在となりました。

前記のようにグリーグは、15歳からライプツィヒに留学してドイツ・ロマン派の影響を受けていますし、20歳から24歳まではデンマークで民族的な音楽の大切さを学びました。さらに18歳でデビューしたピアニストでもありました。この曲には、こうした経験がすべて反映されています。すなわち、ドイツで学んだ協奏曲の形式とロマンティックな音楽、母国ノルウェーの民族音楽、そして彼が得意としたピアノ音楽……これらの要素が合体した作品です。

ドイツ・ロマン派の影響でいえば、同じイ短調のシューマンのピアノ協奏曲との類似性が指摘されており、実際構成面は似ていなくもありません。しかしながら曲想自体は全く違いますし、ノルウェーの厳しくも美しい自然や北欧の抒情性を感じさせる点が、他のピアノ協奏曲にない魅力。1870年にグリーグが持参した楽譜を弾いたリストが、第3楽章のある箇所です。「これが本当の北欧だ」と賞賛したエビ

## 古今最上位の人気作品、ドヴォルザーク『新世界より』

後半は、ドヴォルザークの交響曲第9番『新世界より』。オペラや交響詩も作曲したドヴォルザークですが、結果的に主軸を成したのは、恩人のブラームス同様に、交響曲や室内楽といった“絶対音楽”でした。中でも重要な交響曲は24歳から書いており、その最後を飾るのが、前作第8番から4年ぶりに作曲されたこの作品。東欧の交響曲ではトップ、古今の全交響曲の中でも最上位の人気作です。

51歳を迎えた1892年9月、既に国際的な名声を得ていたドヴォルザークは、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創

ソードもよく知られています。またピアニストとしての手腕は、ソロ・パートに盛り込まれた名人芸的な技巧に表れており、それが豊かなリリズムと融合合っている点が名作たるゆえんでもあります。

**第1楽章(アレグロ・モルト・モデラート)**は、ティンパニのロールの頂点でピアノが華麗に登場する出だしが、ユニークかつインパクト大。これはフィヨルドに注ぐ滝の流れの表現ともいわれています。その後は2つの主題を中心に、ときには甘美、ときには軽快、ときには力強く運ばれ、終結部の前にはグリーグ自身が書いたカデンツァが奏されます。

**第2楽章(アダージョ)**は、北欧の澄んだ空気感を湛えた緩徐楽章。オーケストラが瞑想的な音楽を奏した後にはピアノが入り、清らかで夢見るような音楽が展開されます。途中で華やかな部分も出現。切れ目なく第3楽章へ移ります。

**第3楽章(アレグロ・モデラート・モルト・エ・マルカート)**は、木管楽器が奏する行進曲風の刻みに始まります。舞曲風の活気ある音楽が続き、一度高揚した後、フルートによるのどかな旋律が印象的な中間部へ。最後は壮大に盛り上がります。

立者ジャンネット・サーバー女史からの熱心な誘いに応じて渡米し、1895年4月まで同音楽院の院長を務めました。ちなみに鉄道マニアの彼は、アメリカの新型機関車を見たかったがゆえに承諾したともいわれています。そして当地で黒人霊歌や先住民の音楽を知り、これらの要素と故郷ボヘミア色を融合させた、弦楽四重奏曲『アメリカ』、チェロ協奏曲などの名作を残しました。その第1作が、1893年1～5月に作曲された『新世界より』。同年12月カーネギー・ホールにて初演され、空前の大成功を収めました。



ドヴォルザークはチェコから「新世界」アメリカにわたり、郷愁を誘う名曲を次々に書き上げました  
(pastel by Ludwig Michalek)

アメリカ滞在は僅か2年半。それでいてドヴォルザークの交響曲、協奏曲、室内楽の代表作が生み出されていますから、新世界から得たインスピレーションの豊かさに驚嘆させられます。

ただこの曲、第2、3楽章は、アメリカ先住民の英雄を扱った詩「ハイアワサの歌」から靈感を得たといわれているものの、作曲者自身「先住民やアメリカ民謡の精神を汲んで作曲しただけ」と語っているように、直接的な引用がなされているわけではありません。故郷ボヘミア音楽と同じ五音階を用いた現地音楽への共感、アメリカ特にエネルギーに充ちたニューヨークの印象、母国への郷愁などが融合した作品であり、「新世界“より”」発信されたドヴォルザークの“アメリカ便り”ともいうべき交響曲です。ですから「新世界」だけでは、本来のニュアンスから若干離れてしまいます。

また本作と同年に、チャイコフスキーの交響曲第6番『悲愴』も書かれています。この1893年は、近代音楽の幕開けを告げたドビュッシーの『牧神の午後への前奏曲』誕

生の1年前。『新世界より』と『悲愴』は、古典的な形式に根ざした交響曲史を締めくくる作品でもあります。

曲は、名旋律の宝庫。中でも第2楽章のメイン主題は、後に歌詞が付けられ、「家路」などの名で普及しました。序奏部のホルンによる動機が全楽章に登場し、第4楽章でそれまでの3楽章の主題が再現されるのも、ドヴォルザークには稀な特徴。またシンバルが第4楽章の一打ち(しかも弱音)しかしないことも有名です。

**第1楽章(アダージョ・アレグロ・モルト)**は、静々と始まる序奏に続いて、ホルンが奏する序奏の動機に基づいた第1主題、フルートとオーボエが奏する哀感を帯びた第2主題を軸に進行します。

**第2楽章(ラルゴ)**は、郷愁に充ちた緩徐楽章。イングリッシュ・ホルンが奏する美しい主題を軸とした主部に、クラリネットの愛らしい旋律に始まる中間部が挟まれます。有名なメイン旋律もさることながら、中間部の切なさを湛えた美感も胸を打ちます。

**第3楽章(モルト・ヴィヴァーチェ)**は、スラヴ舞曲風ともアメリカ先住民の音楽風ともとれるスケルツォ。歯切れの良い主部に、軽く弾んだ中間部が挟まれます。

**第4楽章(アレグロ・コン・フォーク)**は、力強く進むフィナーレ。行進曲調の第1主題が中心を成し、クラリネットが歌う優しい第2主題のほか、第1～3楽章の主題も顔を出します。最後は大きく盛り上がりながらも、管楽器の伸ばした音が減衰して終わります。この珍しい終結法に、同曲がただの派手な音楽ではないことが示されているようにも感じられます。

## コラム 初演後、改訂された“名・協奏曲”の数々

グリーグのピアノ協奏曲は25歳時の作品ですが、初演後再三改訂されており、現在耳にするのは、最晩年の1906～07年に大幅な改訂が施された版。しかし出版されたのは死後10年経った1917年で、グリーグ自身も実際の音を耳にしていないのが面白いところです。改訂されたのは、さる解説によるとピアノ・パートで約100箇所、オーケストラで300箇所以上との由。初稿のCD(ピアノ:デルヴィンエル、広上淳一指揮/ノールショピング響。BISレーベル)を聴くと、全体に細かな変更が多く、曲の大筋は変わりませ

ん。それでも、冒頭のティンパニに金管楽器が重ねられる、現行版ではチェロが弾く第1楽章の第2主題をトランペットが奏でる……といった目立つ箇所もあって、作曲者の発想の変遷を伺い知ることができます。

同様の例は他の有名協奏曲にもあり、チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番、メンデルスゾーン、シベリウスの各ヴァイオリン協奏曲、ドヴォルザークのチェロ協奏曲などの初稿もCD(入手困難な盤もあり)で聴くことが可能。ただし、作曲者にとってこれは嬉しいのか迷惑なのか……。

しばたかつひこ(音楽ライター)/音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。コンサートのプログラム、宣伝媒体、CD、雑誌等の原稿執筆およびプログラム等の編集業務のほか、「ラ・フォル・ジュルネ」での講演や一般の講座も行なうなど、クラシック音楽を中心に幅広く活動中。